

〈共同研究〉

「地域研究者と地域実務者が協働して挑む複合科学的なアフリカ・リプロダクション研究」

シエラレオネの女性性器切除とブンドゥー結社

——「サティアの物語」を読む——

落 合 雄 彦

はじめに

筆者がサティア（仮名）と出会ったのは、2007年8月のことだった。筆者は当時、シエラレオネの首都フリータウンの郊外にある同国唯一の精神科病院で入院患者に対する面接調査を実施していた。その調査協力者（被面接者）のなかにいたのが彼女だった。

サティアは、20代後半から幻聴に悩まされるようになり、やがてブツブツと独り言を言ったり、昼夜を問わず家から突如飛び出したりするといった、周囲の人びとからみて奇異な言動をし始める。そして、そうした彼女のことを心配した家族によって精神科病院に連れてこられ、半ば強制的に入院をさせられた。彼女の母親の話によれば、サティアが精神科病院に初めて入院をしたのは彼女が29歳のときであり、その際に家族に告げられた病名は「統合失調症」であったという。以後、サティアは入退院を繰り返すようになり、筆者が2007年8月に精神科病院でサティアと初めて会ったとき、彼女は3度目の入院生活を送っているところだった。しかし、その3度目の入院生活はそれまで以上に長期化しており、すでに5年目を迎えていた。彼女の年齢も40歳に達していた。

筆者は、このサティアとの最初の出会以来、毎年のように同病院を訪問しては彼女と面会をした。サティアはやがて相当程度に寛解し、医師にも退院を促されたが、筆者が病院を毎年訪れるたび、彼女はいつもそこにいた。サティアが寛解し

たにもかかわらず院外で生活できずにいるのは、家族が彼女の引き取りに難色を示しているためだった。そうしたいわゆる「社会的入院」を続けるサティアは、少なくとも筆者の眼には、ただただ時間を持て余しているようにみえた。そこで筆者は、あるとき彼女に次のようなひとつの提案を試みた、「自分のライフヒストリーを書いてみませんか」。

彼女は、その筆者の提案を聞いて快諾をしてくれた。そして、数カ月間をかけて、幼少期から精神科病院への入院にいたるまでの彼女の半生をノートブックに詳細に書き記してくれた。その分量は、シエラレオネで市販されている学習用ノートブックで8冊にも及んだ。そこには、子ども時代の学校での勉強や試験、友人関係、家族関係、恋愛、出産、仕事といったさまざまな物事や出来事が、彼女の本名ではなく「サティア（Satia）」という仮名の女性の物語として、シンプルな文体ではあるが、しかし生き生きと描かれていた。そして、そのなかでもっとも多く紙幅を割いて記述されていたのが、ブンドゥー結社（Bondo Society）と呼ばれる女性結社と、女性性器切除（female genital mutilation/cutting: FGM/C）¹⁾を含む同結社への一連の加入儀式（イニシエーション）というテーマであった。

本稿の目的は、精神障害とともに生きるひとりのシエラレオネ人女性サティアが自らの半生を振り返って綴った自伝的な物語のなかから、ブンドゥー結社とイニシエーションに関する部分のみを

訳出するとともに、そのよりよい理解を醸成するための解説を試みることにある²⁾。

本稿は以下、主に3章で構成される。第1章と第2章では、後述される「サティアの物語」を読むにあたって事前に把握しておくことが有用と思われる、アフリカ、特にシエラレオネのFGM/Cの現状と同国におけるブンドゥー結社の概要についてそれぞれ整理する。そしてその上で、第3章において「サティアの物語」を訳出する。

1 FGM/Cの現状

(1) FGM/C 廃絶の動きを加速させる国際社会とアフリカ

FGM/Cは、アフリカや中東などの一部の社会において古くから行われてきた営為である。しかし、アフリカに関していえば、20世紀に入るとヨーロッパ列強による植民地支配下において、FGM/Cの廃絶が主にキリスト教宣教師らによって唱えられるようになる。そうした宣教師による植民地期のFGM/C廃絶運動として特によく知られているのは、ケニアの事例であろう。

英領ケニア植民地では、20世紀初頭からスコットランド教会ミッション（Church of Scotland Mission）の宣教師が中心となり、教会での説教などを通じてFGM/Cを公然と非難するようになった。そして、1929年にはFGM/C禁止キャンペーンが教会関係者によって正式に開始され、以後それはケニア植民地政府ばかりかイギリス本国をも巻き込む形で大々的に展開されるようになる。これに対して、FGM/Cを自らの伝統文化の一部とみなし、その擁護を謳うキクユ（Kikuyu）という民族集団の人びとが猛反発し、「女性割礼論争」といわれる、死傷者を出すほどの激しい対立へと発展した[土井 1986; プレスリー 1999: 134-140; 額田 2007]。しかし、ケニア植民地では結局、切除する女性器の部分をクリトリス（陰核）のみに限定するといった条令が制定されたりはしたものの、FGM/C自体が全面的に非合法化されるということとはなかった。

1920年代から1950年代にかけてのアフリカでは、こうしたケニア植民地のほかにも、たとえばエジ

プトやスーダンにおいて、医療従事者がFGM/C実施に反対したり、政府がそれを法的に規制したりする動きがみられた[UNICEF 2014: 10]。しかし、そうしたFGM/C実施に反対する動きは、アフリカの植民地の多くが独立を達成する1960年代までは総じて限定的なものでしかなかったといえる。

ところが、1970年代後半になると、国際機関の関係者や欧米のフェミニストなどの間でFGM/Cへの関心が高まり、その廃絶を求める動きが本格化する。たとえば、1979年2月には、「女性と子どもの健康に影響を与える伝統的実践」というセミナーが、世界保健機関（World Health Organization: WHO）の主宰のもとスーダンのハルツームで開催され、その席上、エチオピア、ケニア、スーダン、エジプトといったアフリカ諸国のFGM/Cに関する複数の報告が行われた。このハルツーム・セミナーでは、アフリカ・中東諸国から集まった医療従事者や政府関係者の間でFGM/Cに関する情報が広く共有され、いくつかの重要な勧告が採択されている[ホスケン 1993: 10-11]。また同年、フラン・ホスケンというウィーン生まれのフェミニストが、FGM/Cに関する包括的な文献としては世界初のものとなる『ホスケン・レポート』を上梓した[ホスケン 1993; UNICEF 2013: 10]。FGM/Cの存在自体は、植民地時代から非アフリカ・中東圏の人びとにもある程度知られていたが、このように1970年代後半になると、それはもはやアフリカや中東におけるローカルなイシューではなく、国際的なアジェンダのひとつとして広く注目されるようになる。そしてそれ以降、FGM/C廃絶に向けた動きが、複雑な対立や葛藤を孕みながらも、アフリカ・中東地域の内外で広範に展開され始める。

本稿では、そうしたFGM/C廃絶運動のこれまでの軌跡やそれと密接に関連しつつ展開されてきたFGM/C研究の歴史については、紙幅の関係で詳述しない³⁾。しかしここで指摘しておきたいのは、その後1980年代から1990年代、そして2000年代にかけて、さまざまな国際会議の場や国際メディアなどを通じて共有・醸成されてきたFGM/C廃絶に向けたグローバルな潮流が、近年、その勢

いをさらに加速させつつある、という点である。たとえば2008年には、10の国連機関が『女性性器切除を根絶する』[WHO 2008]と題する共同声明を発表している。また同年、「変化を加速させる」をスローガンとした10年間のFGM/C 廃絶プログラムが、国連人口基金（United Nations Population Fund: UNFPA）と国連児童基金（United Nations Children's Fund: UNICEF）の共同事業として開始された。同プログラムでは、2008年から2013年までの前半5年間（フェーズⅠ）に、FGM/C 根絶のための啓発活動といった諸プロジェクトがアフリカの15カ国において実施されたという[UNFPA and UNICEF 2014]。さらに、2012年12月には国連総会において、FGM/C 廃絶のためのグローバルな努力の推進を謳った決議（A/RES/67/146）が初めて採択され、2014年12月にも同様の国連総会決議（A/RES/69/150）が採択されている。このように、少なくとも国際社会のレベルでは今日、FGM/C は紛れもなく女性への暴力であり、また、明らかな人権侵害であるとみなされ、その廃絶がほぼ反論の余地のないほど完全に国際規範化しているのである。

こうしたFGM/C 廃絶の動きは、しかし、決して国際社会のレベルにとどまらない。FGM/C を規制する条令などが植民地時代に定められたケニアやスーダン、そして、独立直後の1960年代という早い時期にFGM/C 規制法が制定されたギニアや中央アフリカ共和国などを除けば、少なくとも1990年代前半まで、大半のアフリカ諸国ではFGM/C はなんら法的に規制されていなかった。ところが、1990年代後半以降、その規制内容や処罰対象こそ異なるものの、FGM/C をなんらかの形で規制する法令が多くのアフリカ諸国において制定されるようになった。たとえば、ブルキナファソでは1996年、FGM/C が非合法化され、その施術者だけでなく、FGM/C 実施の事実を知りながらそれを通報しなかった者にも罰金刑を科すという法律が制定された。また、モーリタニアでは2005年、政府系医療施設でFGM/C を施術したり、医療従事者がFGM/C に関与したりすることを禁止する法律が成立している。さらにケニアでは、2001年子ども法（Children Act, 2001）によ

ってまず18歳未満の未成年者にFGM/C を受けさせることが法的に禁じられ、次いで2011年女性性器切除禁止法（Prohibition of Female Genital Mutilation Act, 2011）によってその適用範囲が成人女性にまで拡大された。このように1990年代後半以降、アフリカ諸国では、国際社会における廃絶運動に強く影響される形で、FGM/C を禁止あるいはなんらかの形で規制する法令の導入が急速に進んだ。この結果、FGM/C 関連規制法令を全国あるいは州レベルですでに制定しているアフリカ諸国の数は今日、前述したギニアやケニアなどの諸国に加えて、ベナン、チャド、コートジボワール、ジブチ、エリトリア、エチオピア、ガーナ、ギニアビサウ、ナイジェリア、ウガンダ、タンザニア、ザンビア、南アフリカなど、少なくとも24カ国に達している[UNICEF 2014: 8-9]。

このように、国際社会のレベルにおいてまずFGM/C 廃絶の動きが強まり、次いでそれに呼応する形でアフリカ諸国において法的規制の強化が図られるようになった。しかしその一方、FGM/C は、それがすでに非合法化されている国を含む多くのアフリカ諸国において、いまなお広範に営まれ続けている。

図1は、UNICEF が2013年に発表した報告書をもとに、FGM/C がある程度集中的に実施されているアフリカ27カ国のFGM/C 実施率を示したものである[UNICEF 2013]。FGM/C 実施率は通常、ひとつの国のなかでも地域や民族集団によって大きく異なるため、そうした国内的な差異を捨象した同図の取り扱いについては若干の注意が必要だが、少なくともそこからはアフリカにおけるFGM/C 実施の大まかな傾向といったものを看取することはできよう。

図1にあるとおり、15-49歳の女性のFGM/C 実施率が90%を超えていると推定されるアフリカの国は、ソマリア（98%）、ギニア（96%）、ジブチ（93%）、エジプト（91%）の4カ国であり、それにマリ（89%）、スーダン（88%）、ガンビア（76%）、ブルキナファソ（76%）、エチオピア（74%）といった国々が続いている。そして、そうした諸国とともにFGM/C 実施率がいまなお極めて高い国のひとつと推定されているのが、サテ

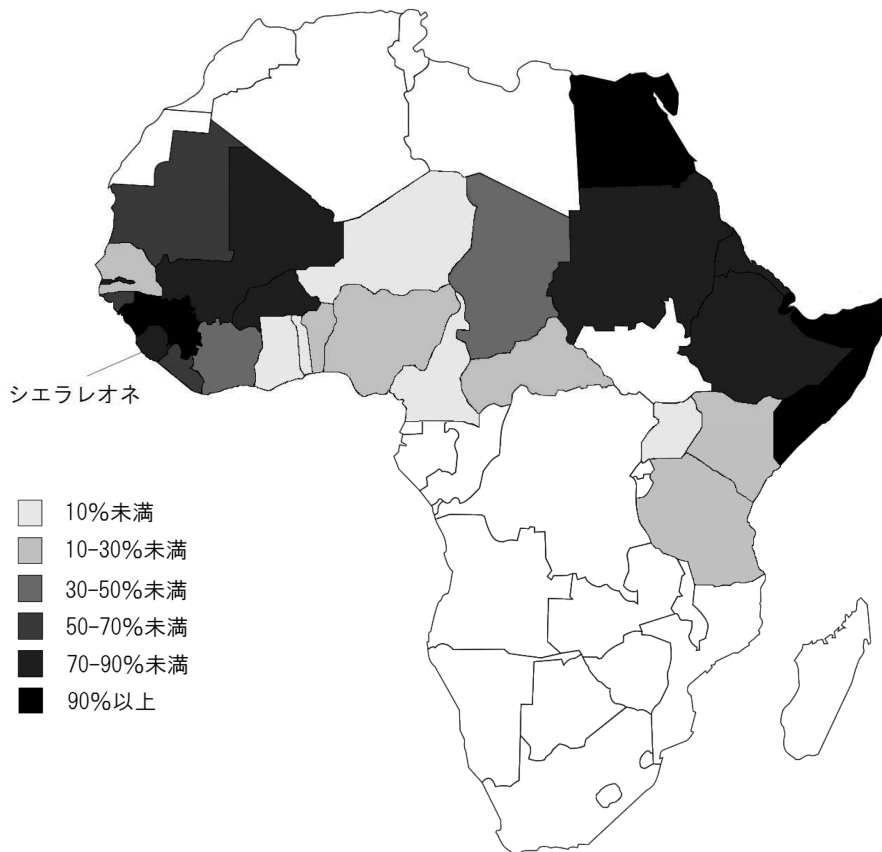


図1 アフリカにおける FGM/C 実施率

出所) UNICEF [2013: 26]をもとに筆者作成。

注) 本図は、15-49歳の女性を対象にした FGM/C 実施率を図示したものである。

ィアが生まれ、育ち、暮らしてきた国シエラレオネにはかならない。

(2) シエラレオネにおける FGM/C

①実施率

シエラレオネに限らず、アフリカ・中東諸国などの FGM/C に関する全国レベルの統計データは、アメリカ国際開発庁 (United States Agency for International Development: USAID) の支援のもとで発展途上国において定期的の実施されてきた「人口保健調査 (Demographic and Health Survey: DHS)」と、UNICEF が開発して各国で定期的の実施している「複数指標クラスター調査 (Multiple Indicator Cluster Survey: MICS)」の2種類の調査からこれまで主に収集されてきた[UNICEF

2013: 4]。そして、シエラレオネでは近年、DHS は2008年と2013年に、MICS は2005年と2010年にそれぞれ実施されており、したがって同国の FGM/C に関する入手可能な全国レベルの最新データは2013年の DHS のものということになる⁴⁾。

シエラレオネにおける15-49歳の女性の FGM/C 実施率は、2008年には91.3%であったが、2010年には88.3%、2013年には89.6%と微減傾向を示している [2008 SLDHS: 256; 2010 SLMICS: 109; 2013 SLDHS: 301]。とはいえ、シエラレオネは今日なお、FGM/C 実施率がアフリカ諸国のなかでももっとも高い国のひとつである。

シエラレオネには、テムネ (Temne)、メンデ (Mende)、リンバ (Limba) といった少なくとも



図2 シエラレオネの行政区分

出所) 筆者作成。

17の民族集団がいるといわれているが、FGM/Cは、クリオ (Krio) やクル (Kru) と呼ばれる人びとを除くほとんどすべての民族集団において行われている[28 Too Many 2014: 23-29]。このため、シエラレオネのFGM/C実施率には、他のアフリカ諸国でみられるほどの大きな地域的差異は存在しないが、それでも若干の地域差がみられる。

ところで、シエラレオネは、行政区分でいえば、首都を含む西部地域 (Western Area) とその後背地ともいえるべきプロヴィンス (Provinces) に大別され、後者がさらに北部州 (Northern Province)、南部州 (Southern Province)、東部州 (Eastern Province) の3州にわけられる。そして、それらの下位に県 (district) という行政区分が置かれている。具体的には、西部地域に2つ、北部州に5つ、南部州に4つ、東部州に3つの県がそれぞれ設けられている (図2参照)。

図3は、そうしたシエラレオネの県別のFGM/C実施率を図示したものである。北部州5県のFGM/C実施率がすべて95%以上と極めて高いのに対して、クリオが多く居住する西部地域は2県とも全国平均を下回っており、北部州と西部地域の間にはある程度の地域差のあることがわかる。

他方、図4は、シエラレオネのFGM/C実施率を年齢・宗教・教育水準・居住環境別に示したものである。年齢別でいえば、30代以上の女性ではいずれの年齢集団においてもFGM/C実施率は95%以上であるのに対して、20代後半は93.2%、20代前半は87.5%と微減し、10代後半になると74.3%へと大きく低下する。無論、こうした若年層、特に10代後半の女性については、これからFGM/Cを経験する可能性があることは否定できない。しかしその一方で、後述するとおり、シエラレオネでは約70%の女性が15歳になる前に

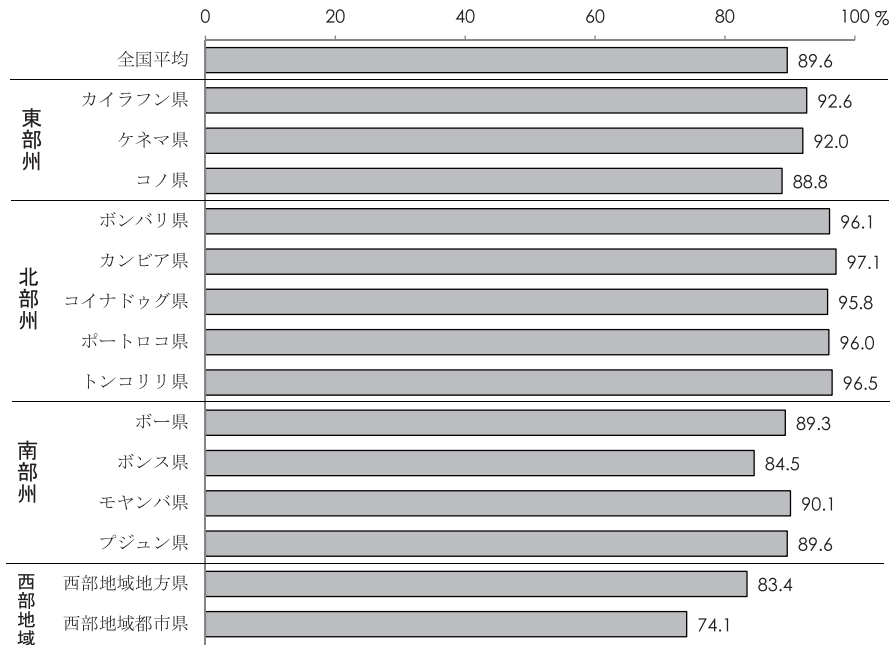


図3 シエラレオネにおける FGM/C 実施率（県別）

出所) 2013 SLDHS, p. 301 をもとに筆者作成。

注) 本図は、15-49歳の女性を対象にした FGM/C 実施率を図示したものである。

FGM/C を受けており、そうした点を勘案すると、10代後半の実施率が30代以上の層よりも20ポイント近くも低いとすれば、それは、シエラレオネにおける FGM/C の実施が将来的に減少していく可能性を強く示唆するものと解釈できよう。

このほか、ムスリムの女性の方がクリスチャンよりも、教育水準の低い女性の方がそれが高い女性よりも、そして、地方部に居住する女性の方が都市部の女性よりも、FGM/C 実施率はそれぞれ高い傾向を示している。

②実施年齢

図5は、シエラレオネの女性が FGM/C を施術された年齢を図示したものである。同図にあるとおり、10-14歳の時期に FGM/C を受けたという女性が40.2%と最も多かった。これに対して、10歳未満で FGM/C を受けたという女性も29.4%いた。両者を合わせると、シエラレオネの FGM/C 経験者の約7割は15歳になる前に性器切除の施術を受けたということになる。

なお、2006年に南部州のボー県 (Bo District)

と北部州のボンバリ県 (Bombali District) で258名の女性 (10-49歳) を対象に実施されたある調査でも、10-14歳の間に FGM/C を施術されたと回答した者が112名 (43.4%) おり、10歳未満で施術された者も69名 (26.7%) いた [Bjalkander et al. 2012b: 326]。同調査による FGM/C 経験年齢の分布は、2013年実施の DHS にもとづく図5のそれと傾向がほぼ一致している。

③タイプ

FGM/C の種類については、WHO による分類法 (2007年改訂) が今日もっとも一般的であろう [WHO 2008: 23-24]。WHO の分類では、FGM/C はまず、タイプ I (クリトリデクトミー)、タイプ II (エクシジョン)、タイプ III (インフィビュレーション)、タイプ IV (分類不能) の4種類に大別される。そしてその上で、タイプ I ~ III については、さらなる下位分類がそれぞれに設けられている (表1参照)。

図6は、2010年10月から2012年5月までの間にシエラレオネの複数の医療機関で実施された、

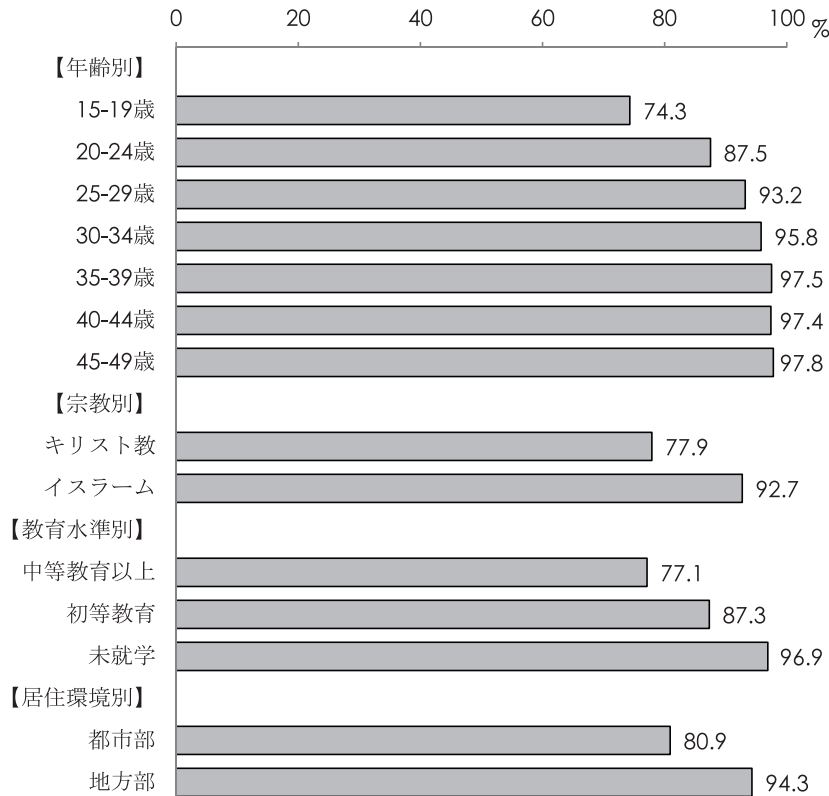


図4 シエラレオネにおける FGM/C 実施率（年齢・宗教・教育水準・居住環境別）

出所）2013 SLDHS, p. 301 をもとに筆者作成。

注）本図は、15-49歳の女性を対象にした FGM/C 実施率を図示したものである。

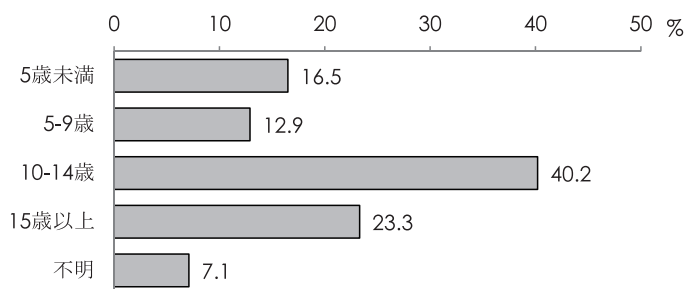


図5 FGM/C を受けた年齢

出所）2013 SLDHS, p. 302 をもとに筆者作成。

FGM/C のタイプに関する調査の結果を図示したものである。調査者の視認によって性器切除の有無やそのタイプを確認した同調査では、554名の調査対象女性のうち451名に FGM/C が認められ、

そのうち、タイプ II b（クリトリスと小陰唇の両方の一部あるいは全部を切除するタイプ）が289名（64.1%）おり、もっとも多かった。次いで、タイプ I b（クリトリスと包皮の両方を切除する

表1 WHOによる女性性器切除の分類(2007年改訂)

タイプⅠ：クリトリスと包皮の両方またはどちらかの一部あるいは全部の切除（クリトリデクトミー）
タイプⅠa：クリトリスと包皮のどちらかの切除 タイプⅠb：クリトリスと包皮の両方の切除
タイプⅡ：大陰唇の切除を伴うことがある、クリトリスと小陰唇の両方の一部あるいは全部の切除（エクシジョン）
タイプⅡa：小陰唇のみの切除 タイプⅡb：クリトリスと小陰唇の両方の一部あるいは全部の切除 タイプⅡc：クリトリス、小陰唇、大陰唇すべての一部あるいは全部の切除
タイプⅢ：クリトリスの切除を伴うことがある、小陰唇と大陰唇の両方またはどちらかの切除および付着による被膜の形成を伴う性器開口部の狭窄（インフィブレーション）。
タイプⅢa：小陰唇の切除および付着 タイプⅢb：大陰唇の切除および付着
タイプⅣ：分類不能（たとえば、刺針、穿孔、切開、削除、焼灼といった、非医学的な目的のために行われる、女性器に対するその他のすべての有害な施術）
出所）WHO [2008: 24]をもとに筆者作成。

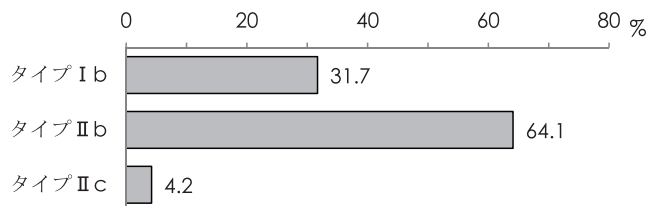


図6 FGM/Cのタイプ

出所）Bjälkander et al. [2013: 8]をもとに筆者作成。

タイプ) が143名 (31.7%)、タイプⅡc (クリトリス、小陰唇、大陰唇すべての一部あるいは全部を切除するタイプ) が19名 (4.2%) いた[Bjälkander et al. 2013: 8]。

このようにシエラレオネのFGM/Cの場合、クリトリス（包皮を含む）や小陰唇を切除するタイプのものが大半であり、性器開口部を縫合して部分的に封鎖したり、大陰唇を切除したりするケースはほとんどみられないことがわかる。

④施術者と医療化

図7は、シエラレオネにおけるFGM/C施術者の種類別割合を示したものである。

一部のアフリカ諸国では、医師、看護師、助産

師といった医療従事者が性器切除を行う、いわゆる「医療化」が進展してきた。そうした医療化傾向がもっとも顕著なのはエジプトであり、同国では、FGM/Cの77%が医療従事者によって施術されているという[UNICEF 2013: 43-45]。

これに対して、図7にあるとおり、シエラレオネでは医療化傾向はほとんどみられず、FGM/Cの95.5%が伝統的施術者によって行われている。そして、そうした伝統的施術者の大半を占めるのが、後述するブンドゥー結社の切除者にほかならない。

なお、図7では「不明」と回答した者が4.2%みられるが、これは、乳幼児期に性器切除を受けたために本人が施術者を記憶していないケースの

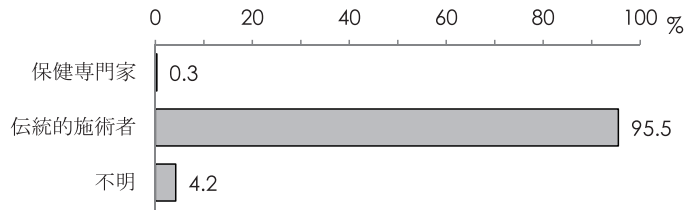


図7 FGM/Cの施術者

出所) 2008 SLDHS, p. 258 をもとに筆者作成。

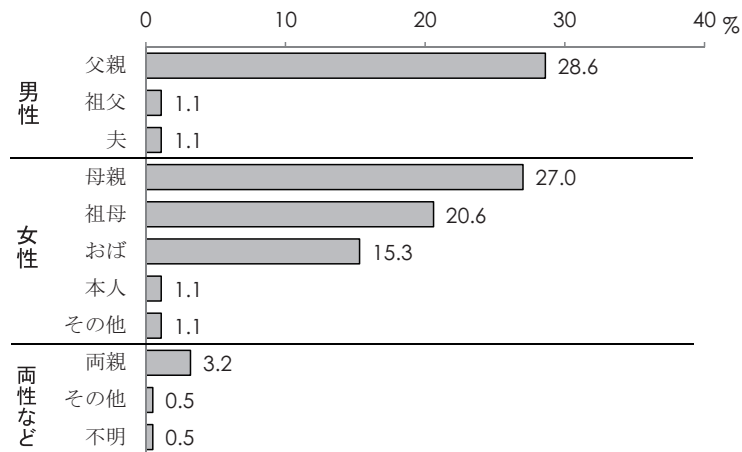


図8 FGM/C実施の意思決定者

出所) Bjälkander et al. [2012a: 124], Bjälkander [2013: 34] をもとに筆者作成。

あることが一因と考えられる[2008 SLDHS: 258]

⑤意思決定者

図8は、性器切除経験のある10-20歳の女性189名を対象として2009年11月から2010年1月までの間にシエラレオネ北部州で実施された、FGM/C実施の意思決定者に関する調査の結果を図示したものである。同図にあるとおり、FGM/C実施の意思決定者として「父親」を挙げた女性が54名(28.6%)と最も多く、次いで「母親」と回答した者が51名(27%)、「祖母」が39名(20.6%)、「おば」が29名(15.3%)であった。「母親」「祖母」「おば」といった女性アクター全体を合算すれば、女性が意思決定をしたケースは65.1%にのぼり、やはりFGM/C実施については女性側の認識や判断が重要であることがわかる。しかしその一方、父親が娘のFGM/C実施を単独で意思決定

しているケースも3割近くあり、シエラレオネのFGM/Cでは、「母親」「祖母」「おば」という3種類の女性アクターに加えて「父親」の存在がその意思決定において重要な役割を果たしているといえる[Bjälkander 2012a: 124; Bjälkander 2013: 34]。

⑥意識

図9は、15-49歳の男女を対象に実施した、FGM/Cに関する意識調査の結果を示したものである。FGM/Cを宗教的に必要なものとする者の割合は、男性が47%であるのに対して女性は55.6%であり、女性の方がFGM/Cを必要とみなす傾向が強いことがわかる。このように女性のFGM/C支持率の方が男性よりも高いというのはけっしてめずらしいことではなく、同様の傾向は、ギニア、マリ、エリトリアといった他のアフリカ

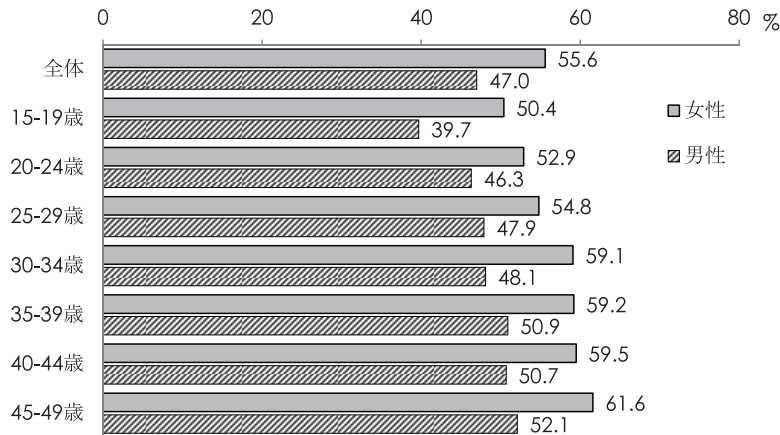


図9 FGM/Cを宗教的に必要なもの考える者

出所) 2013 SLDHS, p. 303 をもとに筆者作成。

諸国でもみられる[UNICEF 2013: 62]。

また、FGM/Cに関する意識を年齢別にみると、45-49歳のシエラレオネ人女性の61.6%がFGM/Cを宗教的に必要なものと考えているのに対して、15-19歳の女性ではその割合は50.4%にまで低下する。このように世代が若くなるにしたがってFGM/C支持率が低下する傾向は、男性の場合にも認められ、そうしたことを勧奨すると、シエラレオネにおけるFGM/Cの実施はやはり今後次第に減少していくものと推測される。

⑦廃絶運動と法規制

これまでシエラレオネでは、医療従事者やNGO関係者などによってFGM/C反対が唱えられたことはあるが、女性性器切除に対する法規制が本格的に導入されたことはない。

シエラレオネにおけるFGM/C廃絶運動のいわば嚆矢といえるのは、ナイジェリア出身の産婦人科医オンラインカ・コソ＝トーマスによる活動であろう。コソ＝トーマスは1987年、シエラレオネにおけるFGM/Cの状況とその廃絶に向けた独自の20年間プランを記した『女性の割礼——根絶のための戦略——』[Koso-Thomas 1987]と題する著作を公開している。同書は「シエラレオネという一地域を対象とした提言であるが、彼女の廃絶計画は他の地域にも適用できるモデルとして評価」された[富永 2004: 176]。しかし、当時のシエラ

レオネではFGM/C廃絶運動への風当たりが今日以上に強く、同書は公開後すぐに政府によって国内発売禁止処分を受けている[28 Too Many 2014: 55]。

前述のとおり、1990年代後半になるとアフリカ諸国では、FGM/Cへの法的規制強化の動きがみられるようになるが、シエラレオネでは、1991年から2002年までの間、大規模な武力紛争が展開されたこともあって、そうしたFGM/C規制のための法整備が本格的に議論されるということとはなかった。

しかし、紛争終結後、さまざまな国際機関、外国政府系援助機関、国際NGOなどが戦後復興や平和構築のためにシエラレオネに流入するようになると、同国におけるFGM/Cの慣習とそれに対する政府の無策が批判され始める。そして、そうしたなかで女性性器切除を法的に規制しようとする気運がシエラレオネ政府内部でも一時高まった。具体的には、シエラレオネでは2007年に子ども権利法(Child Rights Act, 2007)が制定されたが、その策定プロセスのなかで、子どもに対するFGM/Cを禁止する条項を同法に盛り込むことが政府内部で検討された。しかし結局、そうした法的規制の導入は時期尚早と判断され、FGM/C禁止条項が子ども権利法に盛り込まれることはなかった[Bjälkander 2013: 17]。

この結果、シエラレオネにはいまなおFGM/C

を直接規制する法令は存在しない。しかし、2007年に成立したシエラレオネの全人民会議（All People's Congress）現政権は、それまでのシエラレオネ人民党（Sierra Leone People's Party）政権と同様、FGM/Cを全面的に禁止する法規制の導入には依然として慎重なものの、その一方で、18歳未満の未成年者についてはFGM/Cを受けさせないことが望ましいという公的立場をすでに表明している[28 Too Many 2014: 55]。そして、こうしたシエラレオネの政府方針もあって2012年10月には、未成年者に対してFGM/Cを施術しないことを誓約するという趣旨の覚書が、シエラレオネにある14県のうちの8県の施術者代表やチーフらの間で調印された。しかし、そうした覚書はあくまでも「紳士協定」にすぎず、なんらの法的拘束力も持たなかったため、FGM/Cはその後も未成年者対象のものも含めてシエラレオネ全国で広範に実施されてきた⁵⁾。

しかし、そうした状況は、2014年になってまさに一変する。その契機となったのが、同年のエボラ出血熱の感染拡大であった。シエラレオネ政府は2014年11月、エボラ封じ込め対策の一環としてFGM/Cの実施を全面的に禁止し、違反者に対しては50万レオン（約115米ドル）の罰金を科すと発表した⁶⁾。こうしてシエラレオネでは、それまでまったく予想もしていなかったような形でFGM/Cの法的な全面禁止が「実現」したのであり、施術者側もエボラ感染を恐れてFGM/C実施を自粛するようになった。しかし、そうしたFGM/Cに対する政府側の規制や施術者側の自制は、あくまでもエボラ感染拡大に伴う一時的な現象であり、けっして恒久的なものではない。したがって、シエラレオネにおいてエボラ禍が終息し、日常性が取り戻されれば、FGM/Cの禁止というエボラ対策のための緊急避難的措置は政府によって解除されるであろうし、仮にそれが公式に解除されない場合であっても、その施術は今後各地で漸進的に再開されていくものと予想される。

2 ブンドゥー結社の概要

(1) 目的と組織

ギニア、シエラレオネ、リベリア、コートジボワールといった西アフリカ諸国に居住する民族集団のなかには、男性の場合にはポロ結社（Poro Society）、女性の場合にはサンデ結社（Sande Society）あるいはブンドゥー結社と呼称される秘密結社が広範にみられる⁷⁾。秘密結社というと、たとえばアメリカの白人至上主義団体であるクー・クラックス・クラン（Ku Klux Klan）や世界的な友愛・社会奉仕団体であるフリーメイソン（Freemasonry）などがすぐに想起されるかもしれないが、シエラレオネなどにみられるポロ結社やブンドゥー結社はそのどちらの組織とも様相を大きく異にする。男性結社であるポロにせよ、女性結社であるサンデやブンドゥーにせよ、異性などの部外者に対して結社の活動内容を秘匿しなければならないという点では、たしかにそれらは秘密結社といえる。しかし、結社の存在自体が社会的に広く公にされていること、その構成員であることもほとんど秘匿されていないこと、そして、何よりもコミュニティの大半が男女いずれかの結社の構成員になっていることなどを勘案すると、ポロ結社やブンドゥー結社の秘匿性は必ずしも高くない。そのため、研究者のなかには、それらを「秘密結社（secret society）」と呼ぶのは不適當であるとして、「友愛組織（sodality）」といった呼称を用いる者もいるという[Fanthorpe 2007: 1]。

ポロ結社やブンドゥー結社の主な目的は、「完全に社会化された人間の生産」[Fanthorpe 2007: 2]にある。別言すれば、それらの結社は、「社会的結束のために少年少女を「期待される」ようなコミュニティ構成員へと社会化する組織」[Bosire 2012: 66]といえる。具体的には、少年の場合にはポロ結社に入り、そこで、動物を捕えるための罠の仕掛け方、漁網の作り方や漁法、木橋の架け方、ドラムの叩き方、ポロ歌の歌い方、アクロバティックなダンス法、家庭やコミュニティにおける男性としての役割や倫理といった諸事項を学ぶ。これに対して少女は、ブンドゥー結社への加入儀式を通じて、年長者への接し方、結婚後の夫とそ

の親族との人間関係の築き方、料理や掃除といった家事の仕方、育児方法、ブンドゥー歌の歌い方などについて学ぶことになる。どちらの結社の場合も、そのイニシエーションのなかには歌やダンスといったレクリエーションで文化的な修業が含まれるが、その比重は女性結社であるブンドゥーの方が総じて高いという[Little 1967: 120-122, 128]。

ブンドゥー結社の長のことを一般にソウエイ(Sowei)という⁸⁾。ソウエイの下には、リバ(Ligba)と呼ばれる補佐役やサンパ(Sampa)と呼ばれるダンサーの長などがおり、そうした幹部らが他の一般メンバーと協力しつつ結社を運営する[Bosire 2012: 67-68]。ブンドゥー結社に加入できるのは女性だけだが、チーフに限っては、たとえそれが男性であっても例外的に同結社の名誉職に就くことがある[Bjälkander 2013: 15]。

ブンドゥーはまた、仮面結社でもある。各結社は通常、「ソウエイ・マスク(Sowei mask)」あるいは「ブンドゥー・マスク(Bondo mask)」と呼ばれる木製の仮面を複数保有している。そうした仮面は、人間の女性の顔や髪型を模して作られてはいるものの、ラフィアヤシや布で全身を覆い隠した女性ダンサーが仮面を頭部にかぶり、「ブンドゥー・ドラム(Bondo drum)」などの楽器による演奏や人びとの歌声に合わせて「ブンドゥー・ダンス(Bondo dance)」を激しく踊るとき、そこには「ブンドゥー・デビル(Bundo devil)」と呼ばれるような霊が宿るものと考えられている。

ブンドゥー結社は、村や町の周辺に「ブンドゥー・ブッシュ(Bondo bush)」と呼称される、部外者の立ち入りが制限された聖なる森をもつ。そして、そこには通常、ブンドゥーの諸霊が住まうとされる小川や清水があり、そのそばに「ブンドゥー・ハウス(Bondo house)」といわれる小屋が建てられている。そして、こうしたソウエイ、仮面、ドラム、ダンス、精霊、歌、森、小川、小屋といった「ブンドゥー結社的なセッティング」のなかで執り行われるのが、FGM/Cを含む同結社のイニシエーションにほかならない。

(2) イニシエーション

シエラレオネの特に農村部では、女性が10-14歳頃の年齢に達すると、母親、祖母、おばなどがそうした適齢期の少女にイニシエーションを受けさせるためのブンドゥー結社を探し始める。通常はもっとも近隣のブンドゥー結社で少女にイニシエーションを受けさせるが、修業内容やソウエイなどの評判が悪かったり、イニシエーション費用が不当に高額だったりすると、親類や知人などがある遠方のブンドゥー結社に少女を送ることもある。また、家族側ではなくソウエイ側が、適齢期の少女がいる家庭を個別に訪問し、自分のブンドゥー結社で加入儀式を受けさせるようにと勧誘をすることもあるという[Bjälkander 2013: 8]。

ブンドゥー結社のイニシエーションが行われるシーズンは通常、雨季が終わったのちの11月頃から翌年5月頃までの、ほぼ乾季に相当する約7カ月間である。とはいえ、少女がこの全期間にわたってブンドゥー結社のイニシエーションを受け続けるというわけではない。かつてイニシエーションの期間は数年間にも及んだが、近年では学校教育や費用負担などの関係もあって、その期間は数週間程度に大幅に短縮されている。つまり、シエラレオネでは乾季になると、適齢期の少女何人かが一組となってブンドゥー結社に連れてこられ、そこで数週間にわたって加入儀式を受けるのであり、そうした少女のグループはシーズン中に一組だけではなく、しばしば五月雨式にやってくるのである[Bosire 2012: 73]。また、ブンドゥー結社のイニシエーションはあまり雨季には行われませんが、後述するサティアの場合のように、学校の休業期間などとの関係で雨季に娘を入社させる親もいる。

ブンドゥー結社への加入儀式の具体的な内容は民族集団や結社によって異なるものの、それは大別して、①ブンドゥー・ブッシュへの招き、②ブンドゥー・ブッシュでの隔離、③FGM/Cなどの諸儀礼、④修業、⑤披露のための諸儀式、という5つのフェーズから成る[28 Too Many 2014: 21]。

その始まりを告げるのがブンドゥー・ドラムである。入社のために村の広場に集められた少女たちは、ブンドゥー・ドラムの演奏が始まると、ソ

ウェイをはじめとする結社メンバーに伴われて行進しながら村を去り、聖なるブッシュのなかに入っていく。そして少女たちは、あらかじめ彼女たちの身の回りの世話役に指名されていた結社メンバーの女性の指示のもと、ブンドゥー・ブッシュのなかで数週間にわたって隔離生活を送りながら、いわば「ブッシュ・スクール (bush school)」の一連の「カリキュラム」をこなしていくのである。

そうしたブッシュでの生活の初期段階で行われるのがFGM/Cである。少女たちは、森のなかでまず目隠しをされ、地面に敷かれたマットなどに座らされるか寝かされた上で、刃物で性器を切除される。ソウェイが性器を切除している間、他の結社メンバーは、少女たちの悲鳴や泣き声がブッシュの外に漏れないようにするために、ドラムを激しく叩き、大きな声でブンドゥー歌を歌い続けるという[Koso-Thomas 1987: 22]。FGM/Cが終わると、少女たちは森のなかに建てられた小屋に移され、そこで寝起きをしながら性器の傷口が治癒するのを待つ。

やがて痛みが和らいで動くことができるようになると、少女たちは、結社メンバーから歌、ダンス、家事や育児の方法などを学び始める。この間、少女たちはブッシュの外に出ることは許されないが、母親や知人が村や町から面会に来ることはできる。

数週間の修業プロセスを終えると、少女たちは、純潔を意味する「ホジョ (hojo)」という白い粘土を顔や腕などに塗り、ソウェイやブンドゥー・マスクを被ったメンバーなどに伴われ、ドラムの演奏にあわせて行進をしながらブッシュから村にもどり、チーフをはじめとする村人や知人に対してお披露目をする。そしてその後、少女たちがイニシエーションを終えて成人したことをお祝いする宴が盛大に行われる[28 Too Many 2014: 21]。これが、数週間にわたるブンドゥー結社のイニシエーションのおおまかな流れである。

(3) イニシエーションの経済学

ブンドゥー結社のイニシエーションを考える上で看過できないのが、それに要する費用やそこからえられる収入といった経済的な側面であろう。

イニシエーションの費用は、地域、結社、修業内容、期間、切除を受ける女性の年齢、一緒に切除を受ける者の人数などによって異なる。また、その金額は交渉によって決められるため、たとえ同じ結社でイニシエーションを受ける場合であっても、家族によって支払う代金は異なることがある。さらに、富裕者として世間的に高く評価してほしいとか、イニシエーション期間中に自分の娘を特別扱いしてほしいとかと考える親は、付け届け的な意味合いなどを込めて通常の金額よりも多くの代金を支払う[Bosire 2012: 73]。したがって、イニシエーション費用にはいわゆる「相場」というものはなく、日本円換算でいえばそれは、少女ひとり当たり数百円から数千円程度のこともあれば、2万円前後になってしまうこともあるという[28 Too Many 2014: 22]。そうした費用には、ソウェイへの謝礼のほか、少女たちや結社メンバーのイニシエーション中の食費などが含まれる。さらに家族は、こうした現金とは別に、自分自身の収入や各地域の慣例などに従って、魚、肉、米、やし油などの食材をブンドゥー結社に納めるのが一般的である。

しかし、家族の経済的な負担は、そうしたブンドゥー結社に対して納める金品だけではない。「サティアの物語」にもみられるとおり、親には、イニシエーションを終えた娘のために、最新ファッションのドレス、帽子、サングラス、財布、バッグ、腕時計、アクセサリ、靴などを買い揃えるという責任がある。数週間にわたる辛いイニシエーションをブッシュのなかで耐え抜いた娘に対して、ぜひ「晴れ着」を着せてやりたいと思うのは単に親心であるばかりか、そうすることこそがしばしば親の当然の義務とみなされ、それができないような親は人びとの笑い者にされてしまう、と考えられている。さらに、サティアの母親のように、イニシエーションを終えた娘のために専用の美容師やミュージシャンを雇ったり、自宅で数日間にわたってパーティーを開いて来客に酒食を饗したりするようなこともある。そうした経費の一部は親類や知人からの祝儀によって賄われるが、娘にイニシエーションを受けさせるための親の経済的な負担はやはり相当程度重いものとなり、そ

うした費用負担ができないために娘にイニシエーションを受けさせられない親もいるという。

他方、ブンドゥー結社のソウェイは、家族が支払うイニシエーション費用のなかから謝礼という形で自分の取り分を受け取る。ソウェイの女性は、こうしたイニシエーションからえられる謝礼をその主な現金収入源としている場合が少なくない。ちなみにソウェイには、40代以上の中年から熟年、そして老年の女性が多いが、シエラレオネの特に農村部の場合、そうした中高年以上の女性たちが現金収入をえられる術は限られており、ソウェイという仕事はそうした数少ない収入源のひとつとなっている。

また、村のチーフもブンドゥー結社のイニシエーションから裨益する。ブンドゥー結社がイニシエーションを行うためには村周辺にブッシュを確保しなければならないが、その使用許可を与えるのがチーフである。チーフは、シエラレオネ農村部においてはしばしば土地の管理者とみなされており、ブンドゥー結社にブッシュの土地使用とそこでのイニシエーションの実施を認める代わりに、ソウェイから登録ライセンス料を定期的に徴収する。また、チーフは、イニシエーションが実施される毎に、「結婚料 (marriage fee)」と呼ばれる、日本円で少女ひとり当たり数百円程度の金銭をソウェイ経由で受け取るのが一般的である [Bosire 2012: 72]。

このほか、ブンドゥー結社のメンバーは、イニシエーション期間中はブッシュに頻繁に出入りをして少女たちの教育訓練に関わるとともに、彼女たちと一緒に食事を取る。また、村人も、イニシエーション明けの宴席などに招かれ、日頃なかなか食することのできないような肉入りの食事を饗されたりするのである。

ブンドゥー結社のイニシエーションがシエラレオネにおいて今日まで維持されてきた背景には、それがもたらす祝祭的なムードや高揚感といった文化的機能や女性の社会化といった社会的機能に加えて、こうした経済的機能の存在が少なからず影響してきたものと考えられる。

(4) 「サティアの物語」の登場人物

本章では以上、ブンドゥー結社とそのイニシエーションについて概観してきたが、ここでは最後に、次章の「サティアの物語」の登場人物について若干の補足的な説明をしておきたい。

次章には必ずしも明記されていないが、主人公のサティアは、1967年にフリータウンのウィルバーフォースという地区で生まれた。サティアが生まれた当時、父親は国軍の教官、母親は保健ワーカーだった。しかし、両親はサティアが生後4カ月のときに離婚してしまう。その後、母親はシエラレオネ東部の町ケネマに転居したが、サティアはなんらかの理由で母親には引き取られず、フリータウンに住む父親のもとで幼少期を過ごす。そして、サティアが12歳のとき、「ブンドゥー結社に入れるようになった」との知らせがケネマの母親から届くのである。

ブンドゥー結社への入社の知らせを届けてくれたのは、サティアの姉ルキアティだった。サティアはルキアティのことが大好きだったが、同時に姉に対するライバル意識も少なからず抱いていた。ルキアティは、ブンドゥー結社に入社する前に、すなわち成人女性になる前に男性と関係をもって妊娠をしてしまっていた。そして、そのことを怒った母親は、ケネマのブンドゥー結社で姉妹にイニシエーションを一緒に受けさせるものの、姉よりも妹のサティアに先にFGM/Cを受けさせることにした。サティアは、物語のなかで、自分が姉よりも一足早く性器を切除されて女性になれるということ、すなわち自分が今度は「姉」の立場になるということをととても喜んでいる。

そしてサティアは、雨季の7月にルキアティとともにフリータウンを発ってケネマに赴き、ビルマ2という村の近くにあるブッシュのなかで4週間にわたるイニシエーションを受ける。その際にふたりを受け入れてくれたのが、ママ・ナンデイというブンドゥー結社のソウェイと、ママ・クンバという世話役の結社メンバーであった。このほかにも、次章の「サティアの物語」のなかには、母方の祖母やおば、結社メンバーの女性たち、チーフ、村人などが登場する。

それではいよいよ、「サティアの物語」を読ん

でみることにしよう。

3 「サティアの物語」

ブンドゥー結社に入れるとの知らせが届く

サティアは12歳の少女だった。彼女は、シエラレオネの首都フリータウンにあるカトリック系の中学校に通っていた。

それはちょうど雨季の7月のことで、学校はすべて休暇に入ろうとしていた。サティアの姉ルキアティが東部の町ケネマからフリータウンに戻ってきた。家のみんながルキアティの帰宅を歓迎した。サティアは姉のことが大好きだったし、ケネマに行ってしまうていた姉に久しぶりに会えて、ほんとうに幸せだった。

ルキアティは、もとはといえばフリータウンの家から逃げ出したのだ。彼女は、父のいるフリータウンから、母が暮らすケネマへと逃げた。でも、サティアはフリータウンの父のもとに留まっていた。

その夜、ルキアティはケネマにいる母親からのメッセージを知らせてくれた。「ルキアティとサティアのふたりをブンドゥー結社に入れたい、とお父さんに伝えておくれ」と母親に頼まれてきた、とルキアティはサティアに打ち明けた。

サティアは、この母からのメッセージを聞いて、とてもうれしくなった。なぜって、彼女はブンドゥー結社に入れることを長く心待ちにしていたのだから。ブンドゥー結社はアフリカの文化であり、アフリカのすべての少女と女性がそれを経験しなければいけない、とサティアは思っていた。だからサティアは入社の日が待ち遠しかったのだ。

姉からブンドゥー結社の話を聞いたサティアは、急いで父のところまで走って行って、母からのメッセージを伝えた。すると、父は微笑んでサティアに尋ねた、「お前はブンドゥー結社のことが好きかい？」。サティアは答えた、「ええ、もちろんよ」。

父は、「お前をブンドゥー結社に入社させることをこれまでも考えていたけれど、まだ幼すぎるんじゃないかなあと思っていたんだよ」と言った。そのときサティアは心のなかで思った、「私はも

う大きくなったのよ。それに、おじいちゃんは、私が女性になるのを見届けられずに死んでしまったじゃないの」。

サティアは、ブンドゥー結社に入れると聞いてとてもうれしかったが、でも、ちょっぴり怖くもあった。彼女は、すでにブンドゥー結社に入っていたハワというともだちから、ブンドゥー結社の儀式では、リーダーの女性がすべての少女たちのクリトリスを切り取るということをすでに聞かされていたからだ。

サティアは、自分のクリトリスを切り取られてしまうことが怖かった。彼女は自分の寝室に入り、鏡を使って自分のクリトリスをじっと眺めてみた。サティアは、ブンドゥー結社に入れるという話を聞いてからというもの、「クリトリスをカミソリでちょっとだけ切ってみようかしら？」と考えるようになった。でも、結局、怖くてそれはできなかった。

ブンドゥー結社に入るためケネマへ

間もなくサティアの母がケネマからフリータウンにやってきた。母は、ルキアティとサティアをケネマでブンドゥー結社に入れるための手筈について祖母と話し合った。そして、母方の祖母が、すべての親類に対して、サティアたちがイニシエーションを受けることになったと伝えたと、親類のある者はご祝儀を、ある者はお祝いの新品の衣服をもってやってきた。

ある日曜日の朝、ルキアティとサティアは、バスでフリータウンを出発した。「もうすぐブンドゥー結社に入れるんだわ」、そう思うとサティアは、うれしくて仕方がなかった。「その日がやって来たら、私、きっと痛みに耐えてみせる」と彼女は心のなかで誓った。「それに痛みなんて、やがてなくなってしまうものよ」と彼女は自分に言い聞かせた。

フリータウンからケネマまでは車で1日もかからなかった。正午頃にはマシアカ、午後2時にはポーに着き、ケネマに到着したのは午後4時だった。2時間ほど、サティアは姉と一緒にケネマのバスターミナル周辺の繁華な一帯をウロウロしてから、母の待つサンボ・ストリートの家にタク

シーで向かった。

イニシエーションの日

サティアの母は保健ワーカーだった。母は、ルキアティとサティアをマーガレットという友人のところに連れて行き、ふたりにプロカイン（訳者注：局所麻酔薬の一種）の注射を打ってもらった。

翌朝、母は米6カップを測り、サティアに対して、それを臼に入れてつき、粉にするようにと命じた。サティアは重労働の家事には不慣れだったが、米を臼でついて粉にした。そして、その米粉を真新しいヒョウタンの容器に入れて白い布をかぶせ、母の寝室にそっと置いた。

午後3時頃、サティアの母方の祖母らがフリータウンからやって来た。午後4時、母がマーケットから戻ってきた。彼女が乗ってきたタクシーは、買った品物でいっぱいだった。そのなかには、新鮮な魚2ケースのほか、綿製ガーゼ、ラッパ（訳者注：西アフリカで女性が腰などに巻く布）、頭の巻布、米などがあつた。

午後5時、さらに多くの人びとが家にやってきた。これをみた姉のルキアティは、興奮してとても喜んだ。でも、なぜかサティアは全然楽しくなかった。彼女は泣き始めた。みんながサティアのことを心配し、母は「サティア、なぜ泣くの？」と尋ねたが、彼女は自分でもなぜ泣いているのかがよくわからなかった。そこで母は、サティアを抱き、なぐさめながらこう言った、「サティア、あなたが最初に割礼を受けるのよ。なぜかわかる？お姉さんは、ブンドゥー結社に入る前に妊娠をしてしまったから、その罰を受けなければいけないの。だからあなたが最初に割礼を受けて女性になり、そのあとでお姉さんが女性になるのよ」。サティアは、自分が姉よりも先に女性になれると聞かされてとてもうれしくなった。そして、どこからか勇気が湧いてきた。ルキアティとは違ってサティアはまだ処女だったし、そのことが母の何よりの自慢だった。

午後5時半、みんなで家を出て、ある村に向かった。サティアも人びとのなかにまぎれて歩いた。一緒に歩いている祖母をみながら、サティアは、自分がタブーを犯さず、処女のまま割礼を受けら

れることに言い知れぬ幸福感と満足感を抱いた。

人びとは、ビルマ2と呼ばれる村に着いた。村人はサティアら一行を大歓迎してくれた。ブンドゥー結社のソウエイであるママ・ナンデイは、「ルキアティとサティアが私のブンドゥー結社でイニシエーションを受けてくれることになってとてもうれしいわ」と言った。村のチーフらはどこからかやし酒をもってきてそれを地面に注ぎ、コーラの実を神々と分かち合った。

「ルキアティは、ブンドゥー結社に入る前に処女を失って家族に恥をかかせたから、その罰を受けなければいけないんだわ。だから、私が彼女よりも先に割礼を受けて女性になるのよ。そうすることで次の人生では、私こそが「姉」になるんだわ」。サティアは、そんなことをずっと考えていた。

やがて、ルキアティとサティアは、ブンドゥー結社の女性たちに伴われて村を出て、ブンドゥー・ブッシュと呼ばれる聖なる森のなかに入っていた。途中でリーダーが立ち止り、森の神々への祈禱を吟じると、他の女性たちもそれに応唱し、また歩き始めた。

森のある場所まで来て、ルキアティとサティアは服を脱ぐようにと言われた。ふたりが言われたとおりに服を脱ぐと、若い女性がサティアの顔に布を巻いて目隠しをした。しかし、目隠しの布から外が透けてみえてしまっていたので、サティアはこう言った、「ちゃんと目を隠してもらっていないから、外がみえちゃいます」。それを聞いた結社メンバーの女性たちは大笑いをしたが、目隠し布を交換してくれようとはしなかった。ルキアティも同じように目隠しをされたようだった。

目隠しこそされたものの外が透けてみえているサティアの前に、背の高い細身の高齢の女性が現われ、サティアに背を向けて言った、「私の背中にお乗りなさい」。サティアが言うとおりにすると、その老女は彼女を背負ったまま、森のなかのひんやりとする場所まで歩いていった。老女は、そこでサティアをおろし、地面に敷いてある古いマットに横たわるようにと言った。「もし、マットの上に蟻さんが沢山いたら、噛まれちゃうかもしれない」とサティアが躊躇していると、どこか

らともなく母が突然現われて、老女の言うとおりに横になるようにと諭した。

フーディアという母方のおばもそばにいて、サティアにこう尋ねた、「いままでに男性と関係をもったことはある？」。サティアは微笑んで答えた、「もちろんないわ、おばさん」。すると、おばが続けた、「いい、これからちょっと調べてみるから、静かに横になって両足を開いてみて」。サティアが言われたとおりにすると、ほどなくして激しい痛みが股間を走った。サティアがものすごい悲鳴を上げたため、周囲にいた女性たちは急いでブンドゥー・ドラムを激しく叩き、その叫び声をかき消そうとした。

そのとき切られたのは、サティアのクリトリスだった。血が傷口から流れた。老女はリント布製のガーゼを傷口に押し当て、血が陰に流れ込まないようにしてくれた。

それからサティアは、女性たちに抱えられて古いマットから隣の新しいマットへと移された。血は傷口から流れ続け、脚やマットが血で染まった。若い女性たちがそれをふき取りながら、サティアの勇気を称えた。この間、ブンドゥー・ドラムは鳴り続け、何人かの若い女性たちは上半身裸になって激しく踊り、ブンドゥー歌を歌い続けていた。

次いでルキアティも同じように割礼を受けたが、彼女はクリトリスが切られると失神してしまった。女性たちがあらかじめ薬草で作っておいた薬を彼女に飲ませ、胸や頭を擦った。ある女性は、ルキアティの失神には、クリトリス切除を知った彼女の夫の気持ちが表われていると言い、ほかの女性たちは、ブンドゥーの悪霊のせいでは失神したと語った。

ルキアティはサティアの座っているところまで連れてこられ、ふたりは目隠しをはずされた。

すでに森は暗闇に包まれ始めていたので、ふたりはブンドゥー・ハウスに行こうと言われた。ブンドゥー・ハウスは、大きな円形をした建物だった。床はセメントで作られ、屋根は草で覆われていた。なかには、多くのマットが敷かれ、寒さから身を守るための厚布もあった。火も焚かれていた。壁にはブンドゥー・ドラムや漁網が掛けられていた。

ある女性が、ルキアティとサティアのために粥をもってきてくれたが、ふたりは傷口が痛くてとても食べられるような状態ではなかった。それでもふたりは、割礼を受けられたことがとても幸せだった。その夜、ふたりはいつの間にか眠ってしまった。

翌朝、チキンと米スープを朝食に出してもらったが、ふたりは少ししか食べられなかった。出血は止まっていなかった。その日は一日中、来客があった。町からともだちもやってきた。フリータウンで生活してきたサティアとちがって、ルキアティはしばらくケネマに住んでいたの、彼女にはともだちが多くいた。そうしたともだちはルキアティとおしゃべりをしてプレゼントを渡したが、サティアとはあまり話そうとはしなかった。こうした来客がその後一週間あまり続いた。

2 週間目

サティアとルキアティは、イニシエーションの2週間目に入った。ふたりの面倒をみてくれたのはママ・クンバという結社メンバーの女性であり、ふたりは彼女から何曲かのブンドゥー歌を習った。それ以来、ふたりは毎朝ブンドゥー歌を歌うようになった。そして、ソウェイ、世話役、ブンドゥーの神々などに歌を歌って挨拶をした。

毎日午後と夕方にも、ふたりはブンドゥーの神々を喜ばせるために歌を歌った。ふたりは聖なる森から出ることは許されなかった。彼女たちは一日中、ブッシュのなかを歩き、夕方にはブンドゥー・ハウスに戻って寝た。

しばらくして、3人の少女がブンドゥー・ハウスにやってきた。これでイニシエーションを一緒に受けるのは5名になった。

サティアの母は毎晩、仕事からの帰宅途中にふたりを訪ねてきた。その際に母もサティアたちにブンドゥー歌を何曲か教えてくれた。サティアはとても歌が上手だった。フリータウンにいる頃、サティアは家のそばにあるブンドゥー・ハウスから聞こえる歌を覚えたことがある。彼女はその歌が大好きで、自分のイニシエーション中に歌う番が回ってくると、いつもその曲を歌った。そして、ほかのイニシエーションを受けた少女たちもサテ

ィアの歌声に耳を傾け、その歌がとても好きになり、サティアからそれを習った。

ブッシュのなかで暮らしている間、イニシエーションを受けた少女たちは家事の仕方を学んだ。サティアは料理、身だしなみ、家の整理整頓の方法を教わった。ルキアティは料理、自分自身の身の回りの世話、避妊、家事全般について学んだ。物の売り買い、裁縫、夫の世話の方法も教わった。

3週間目に行われる手洗いの儀式

やがてブンドゥー・ブッシュでの生活も3週間目になると、ソウエイによって「手洗いの儀式(Wash Hands Ceremony)」が執り行われる。イニシエーションを受けた少女たちはその後、ブンドゥー・ハウスを離れて村で日中を過ごすことができるようになる。イニシエーションを受けた少女たちは、このときになってようやく男性と面会することを許される。手洗いの儀式の日は、村のチーフや年長者だけではなく町からも多くの人びとが村にやってきてお祝いをする。ともだちや親類がプレゼントをもって村にやってくる。チーフや年長者は、ポロ結社の階級に準じた伝統的衣装を身につけて村の広場に集まる。若い男性も伝統的衣装を着て、戦の歌、愛の歌、そして婚礼の歌などを歌い、広場狭しと踊る。

手洗いの儀式の日の朝、サティアたちは、聖なる森を流れる小川にまず連れて行かれた。澄んだ冷たい水が流れる小川だ。結社の年長の女性が壺のなかに水と薬草を入れて煮る。そして、それを大きな盥に移し、そこに水を入れてぬるめのお湯にした。

5名の少女たちのなかで最初に割礼を受けたサティアがまず、薬草入りの液体で満ちた盥に向かって、ブンドゥーの神々への願い事を3つするようにと言われた。サティアは、「第一に勉強がよくできますように、第二によい夫に恵まれますように、そして、第三に生涯に5人の子宝に恵まれますように」と祈った。そして、ルキアティとほかの少女たちも同じように3つの願い事をそれぞれした。

その後、少女たちは薬草入りのぬるま湯のなかに座るようにと言われた。そして老女が、伝統的

な黒石鹸、灰、サボ（訳者注：ヘチマの一種）で彼女たちの身体を入念に洗った。それは厄払いのためだった。頭のとっぺんからつま先まで洗い、薬草入りのぬるま湯で身体を洗い流した。そして少女たちは、浄められた身体をタオルで拭くことなく、ホジョ（白い粘土）を全身に塗られ、ラッパの布を2つずつもらい、ひとつは腰、もうひとつは胸に巻くようにと言われた。

その頃、ブッシュの別の場所では、料理の準備が進められていた。結社メンバーの女性たちが、「赤飯」と呼ばれる聖なる料理を作っていた。もし、人びとのなかにいる妖術師がそれを誤って口にしてしまうと、激しい腹痛が起こり、自分が妖術師であると告白しないかぎり腹痛はけっして治まらず、ついには死んでしまうこともあると信じられていた。

この赤飯には、魚、辛子、塩、マギー（訳者注：西アフリカでもっとも一般的なスूप・ベース）、異なる薬草などが混ぜられており、妖術師ではない者が食した場合には腹痛を癒したり、妖術を浄めたりする力があるとされていた。

全身にホジョを塗り、ラッパを腰と胸に巻いて座らされていたサティアのもとに、大きな葉の上にのせた赤飯が運ばれてきた。ソウエイは、「これまでに行った悪事をなんでもよいのでその食事に向かって話し、許しを乞うように」とサティアに告げた。それからソウエイは、手で取った赤飯をサティアの口に3回ほど入れて、「残りは自分で食べなさい」と言った。ソウエイは同じことをルキアティやほかの少女たちにもした。少女たちは、お腹がいっぱいになるまで食べた。

その頃、赤飯は村にいるチーフらにも振る舞われていた。彼らはイニシエーションを受けた少女たちのために祈り、ここまで儀式が守られたことをブンドゥーの神々に感謝した。また、赤飯は、大きな葉に盛られて小川のそばの木の下に置かれ、ブンドゥーの神々にも捧げられた。ブンドゥーの神々は水のなかにいる「水の霊」だからだ。

午後4時、村ではドラムが鳴り始めた。イニシエーションを受けた少女たちが行進をしながら村の広場へと入ってきた。白い服を着て、赤い布を頭に巻いたソウエイが少女たちを村の広場まで導

く。ドラムは鳴り続け、男女がそれに合わせて激しく踊った。サティアを先頭に少女たちが村の広場に入ると、彼女たちはチーフらに挨拶をし、その後、一人ずつドラムのリズムに合わせて踊りを披露した。

踊り終えた少女たちが新しいマットの上に座ると、チーフらが彼女たちに助言を始めた。「勉強と仕事に真面目に取り組みなさい。そして、なによりもよい伴侶を選びなさい」とチーフらは少女たちに言った。儀式は午後6時まで続き、その後、少女たちはブンドゥー・ハウスにもどった。

少女たちは、久しぶりにブッシュを出て村に行くことができ、とてもうれしかった。その夜はぐっすりと眠ることができた。

翌朝、彼女たちはいつものようにブンドゥー歌で神々を崇め称え、その後沐浴と食事をしてから、親類に会うために町に出かけた。以来、サティアは毎日のようにブッシュから町に出かけるようになった。ある日、母が新しい靴を買ってくれるというので靴屋に連れて行ってもらった。しかし、サティアの小さな足のサイズに合う靴が見つからず、母は学校用の黒いハイヒールを彼女のために買うことにした。

こうしてサティアとルキアティはブンドゥー結社で3週間を過ごした。そして、「子どもの祝い（Child Cheers）」と呼ばれる次の儀式が始まることになった。それは、親たちが娘たちの勇気を称えるという儀式だった。

4週間目に行われる子どもの祝い

イニシエーションは4週目に入った。サティアは、学校が始まるので、もうそろそろフリータウンに戻らなければならなかった。

ある日の朝、サティアたちはいつものとおりブンドゥーの神々を称える歌を歌い、小川に行って沐浴をした。それから水を汲み、それを森の端まで持って行って、鍋やお皿を洗った。そして、薪を割り、洗濯をした。雨季だったが、その日、雨は降らなかった。

午後4時頃、母親たちやブンドゥー結社の女性たちがブンドゥー・ハウスにやってきた。そして、ドラムが鳴り始め、母親たちは娘たちと踊った。

サティアの母も彼女と一緒に踊った。そして、母はサティアにノート、ボールペン、鉛筆をプレゼントしてくれた。母は、姉のルキアティとも一緒に踊り、やはりノート、ボールペン、鉛筆、そしてナイロン製のバッグを贈った。母は手先が器用で、ナイロンでバッグを編むことができた。

ルキアティには男性のともだちがいて、彼らも来ていたので、ルキアティは彼らとも踊った。男性のともだちは、ルキアティにお金や手紙を渡した。

その2日後、ブンドゥー結社のイニシエーションの終わりを告げる「招霊の儀（Soul Call Rite）」という儀式が行われることになった。

招霊の儀の夜

その夜、ともだちや親類が村に三々五々集まってきた。村の広場には焚火がたかれ、ドラムが鳴り響き、人びとが踊った。

午後10時頃、ブンドゥー結社の若い女性たちが少女たちに儀式を行う。少女たちは、ブッシュのなかにあるブンドゥー・ハウスの外に一列に並ばされた。サティアが最初にハウスのなかに入るようにと言われた。サティアが言われたとおりに内部に入ろうとすると、入口の床の所に葉が敷かれていた。結社メンバーの若い女性が、サティアの右足と左足を3回ずつ拭いてくれた。それからその女性は、「葉の上を前後に3往復飛び、4回目に小屋のなかに入りなさい」とサティアに告げた。サティアが言われたとおりに葉の上を3往復飛び、4回目にハウスのなかにはいると、内部で待っていた若い女性たちが、白い布で巻かれた枝葉の束で彼女の全身を擦った。ほどなくしてサティアは、体中が傷だらけでヒリヒリと痛くなり始めた。ほかの少女たちも同じようにされ、身体が傷だらけになった。この儀式は、少女たちが歓迎されない場所に入ったり、敵の領域に入ったりすることがないようにするためのものだった。

招霊の儀はその後徹夜で行われ、村では翌朝6時まで歌と踊りが続いた。

ブンドゥー結社での最後の日

ブンドゥー結社への加入儀式は全体で4週間か

かった。少女たちは、早く町にもどりたくて仕方なかった。

ブンドゥー結社最後の日の早朝、少女たちは聖なる森の小川に連れて行かれた。前日に雨が降らなかったの、森はそれほど涼しくはなく、小川の水はとても澄んでいた。

サティアは、「ブンドゥー結社のイニシエーションに耐えるために、私もほんとうによく頑張ったなあ」と感じた。入社の前にもとだちのハワから、割札前の少女は年長の女性たちにいじめられて鞭でよく叩かれる、と聞かされていた。だからサティアは、ブンドゥー結社に入るときには、誰に対しても失礼のないように接し、みんなを敬おうと心に決めていた。そのおかげで、サティアは年長の女性に鞭で叩かれずに済んだ。「もし、子どもの祝いの儀式がケネマじゃなくてフリータウンで行われていたら、きっとお父さんも私のことをほめてくれたに違いないわ」とサティアは思った。そして、そう思うととてもうれしくなった。

結社メンバーの女性たちがハウスにやって来て、サティアたちに別れを告げた。

面倒をみてくれたママ・クンバが火をおこし、その上に壺を置いた。そして、薬草と水を壺のなかに入れ、少女たちに髪をほどくようにと告げた。

壺のなかの水が煮立つまでの間に、少女たちは自分の髪をほどいた。ママ・クンバは、地元の黒石鹼、灰、イギリスの香り石鹼、そしてサボをもってきていた。彼女は、薬草を煮た液体を大きな盥に注ぎ、いつものようにそれを水で薄めた。それからまずサティアに向かって、その盥のぬるま湯のなかに座ってしばらく浸かるようにと言った。サティアが言われたとおりにすると、それからママ・クンバは彼女を立ち上がらせ、彼女の股間に顔を近づけて割札の傷跡を確認した。「鏡を使ってこの傷跡を見てはいけないよ」とママ・クンバはサティアに忠告した。しかしサティアは、ちょっと怖いけれども、自分のクリトリスがどうなっているのかを見たくて仕方なかった。

ママ・クンバは、サボを使いながら黒石鹼と灰でサティアの全身をくまなく洗った。ママ・クンバは、サティアに対して、「これまでにしてきたすべての悪事を神々に告白しなさい」と言った。

また、「神々に願い事もしなさい」と言った。さらに彼女は、サティアを洗っている間、何か呪文のようなものを口ずさんでいた。

次にママ・クンバは、サティアにイギリスの香り石鹼を渡し、「小川に入って身体と髪を洗ってきなさい」と命じた。そして、願い事や悩みを神々に伝え続けるようにとも言った。サティアは言われたとおりにした。彼女はいつも学校の試験のことを心配していたので、「どうか勉強がうまくいきますように」と祈った。

ルキアティとはかの少女たちも同じように身体を洗ってもらった。それからママ・クンバは少女たちを小川からブンドゥー・ハウスにまで連れて行き、そこで親が迎えに来て服を着せてくれるまで待つようにと言った。

正午頃、大きな音が外から聞こえてきたので、少女たちがハウスの外に飛び出してみると、3人の少女たちの親のグループだった。人びとはみな踊っていた。午後2時頃になって、外からまた物音が聞こえてきた。今度はルキアティとサティアの親類のグループだった。サティアは大笑いし、ルキアティも喜び踊った。

サティアのグループは、ジャズ音楽のミュージシャンを引き連れてやってきた。でも、音楽はサティアの関心事ではなかった。サティアは、新しい服と靴を早く身につけたくて仕方なかった。母は、グリーンのスーツケースを携えてやって来た。若い美容師も一緒だった。その女性は、マミー・ジャジュアという、ケネマの町でも一番の腕前といわれる美容師だった。マミー・ジャジュアはサティアの髪を梳いて長く伸ばし、ホットカールをしてくれた。ルキアティもカールをしてもらった。

母が持ってきたグリーンのスーツケースのなかには、新しい衣服、靴、アクセサリー、口紅、財布、化粧品などが沢山入っていた。それを見たサティアとルキアティは微笑んだ。

サティアは、母からブラウンのブラジャーを手渡された。彼女はまだブラジャーを着けたことがなかった。「私はもう女性なんだわ。だからブラジャーを着けるのよ」とサティアは思った。また、ブラックのスリッパを着て、さらに青いシルクのガウンを身にまとった。こうなると、あとは足の

爪の手入れをして、ブラックのハイヒールを履くのが待ち遠しくてならなかった。

大喜びするサティアを見て、みんな大笑いした。母は、サティアに金色の首飾りとイヤリングをくれた。また、白い革製ベルトの腕時計もくれた。ルキアティも母から服をもらい、白いハイヒールのサンダルを履いた。ふたりは口紅とアイブローもつけてもらった。

驚いたことに、ルキアティとサティアの身だしなみが整うとすぐに、仮面をつけたふたりのダンサーがどこからともなく現われた。それを見た人びとは大喜びをした。ダンサーはサティアとルキアティの周りを激しく踊った。

午後4時頃、イニシエーションを受けた少女たち全員が村のチーフのもとに集まった。そして少女たちはチーフの前に整列し、ソウェイのママ・ナンデイがチーフに対して加入儀式の終了を報告した。するとチーフは、神々のために地面に酒を注ぎ、少女たちに軽く水をふりかけた。これに対して親たちは、チーフ、村人、ソウェイ、その他の結社メンバーなどにお礼を言った。特に、サティアの母は、「世話役のママ・クンバには娘たちが何から何まで大変お世話になりました」と言い、ラッパ、米半袋、謝礼を贈った。

午後5時頃、少女たちと迎えの人びとは、ケネマの飛行場に向かって歩き始めた。すると驚いたことに、そこには2台のタクシーがルキアティとサティアの一行を待っていた。ほかの3人の少女たちの親はタクシーまでは準備していなかったので、サティアの母は自分が用意した2台のタクシーのうちの1台を彼女たちに譲ってあげた。

ジャズ・バンドが演奏を始め、人びとは踊り始めた。イニシエーションを受けた少女たちはタクシーに分乗した。サティアとルキアティのふたりは新しい赤いタクシーに、ほかの3人の少女たちはちょっぴり古い青いタクシーに乗った。そして、飛行場を通過してハンガ・ロードに入り、コロマ・ストリートからサンボ・ストリートへと向かった。

サティアたちのタクシーが先頭をいき、次にジャズ・バンドを乗せた車両が続き、最後は3名の少女たちが乗ったタクシーだった。サンボ・ストリートとコロマ・ストリートの交差点で、3名の

少女たちのタクシーはジャネ・ストリートの方向へと向かい、サティアらのタクシーはサンボ・ストリートへと入った。

ケネマの家、そしてフリータウンへ

サンボ・ストリートの家に4週間ぶりにもどると、そこには大勢の人びとがふたりの帰りを待っていた。別のバンドが家にはいたので、ブッシュから同行してきたジャズ・バンドは演奏をやめた。ルキアティとサティアは家の前でタクシーから降り、ベランダに入った。そこには、カーベットが敷かれ、美しい布で覆われた椅子が2脚置かれていた。

サティアとルキアティは椅子のそばに立ち、一緒についてきたソウェイのママ・マンデイが彼女たちの足に触れ、何かの呪文を唱えてから、座るようにと言った。

サティアは幸せだった。カメラマンが写真を撮る何枚か撮影してくれた。それから、ご飯のお皿とスター・ビールが運ばれてきた。サティアはご飯を食べ、ビールを飲んだ。

ともだちがベランダに来て、お祝いを述べ、お金を置いていった。ルキアティはサティアよりもお金を多くもらった。サティアにはケネマにほとんどともだちがいなかったからだ。ルキアティにはともだちが沢山いた。夜になり、サティアとルキアティは、母の寝室のベッドでぐっすりと眠った。

翌朝、サティアとルキアティは朝のお祈りをし、入浴し、別の新しい服を着た。こうして続く3日間、ふたりはベランダの椅子に座り、次から次にやってくる来客に挨拶をして過ごした。ともだちや親類は、ふたりに挨拶をしてはお金を置いていった。

3日後、サティアはケネマを発ち、フリータウンにもどっていった。

むすびに代えて

サティアがブンドゥー結社のイニシエーションを受けたのは、彼女がちょうど12歳のときであったというから、それは1979年か1980年頃のこと

あったと思われる。当時のシエラレオネでは、適齢期の少女がブンドゥー結社のイニシエーションを受け、そのプロセスのなかで性器を切除されるというのは、ごく自然なことであった。たとえば、前述の図4でいえば、サティアは「45-49歳」の年代に属するが、その年代のシエラレオネ人女性のFGM/C実施率は実に97.8%に及ぶ。したがって、サティアには、ブンドゥー結社のイニシエーションを受けるか受けないかという選択肢は、もともとほとんど存在しなかった。前章にあるとおり、12歳のサティアにとっての関心事とは、イニシエーションを受けるか否かではなく、それを一体いつ受け(られ)るのかという点にこそあった。そして、ブンドゥー結社に入れるとの知らせを母親から受け取ったサティアは、待ちわびていた機会がようやく到来したことを知り、大いに喜ぶ。もちろん、クリトリス切除への恐怖やブンドゥー結社内でのいじめへの不安はあった。しかし、それでもサティアの場合には、イニシエーションをめぐる不安や恐怖心よりも、むしろそれを受けられることへの喜びの方がはるかに勝っていたようにみえる。そして、前章の物語では、そうした「喜び」を基調とする、ブンドゥー結社のイニシエーションに対するサティアの総じて肯定的な眼差しともいえるべきものが随所に感じ取れる。

FGM/Cは今日、少なくとも国際社会のレベルでは、女性への暴力や人権侵害とみなされ、その廃絶が強く謳われている。また、FGM/C反対論者のなかには、性器切除とイニシエーションを切り分け、後者を文化社会的な価値をもつものとして肯定あるいは尊重する一方、前者のみを女性への人権侵害として否定しようとする向きもある。しかし、「サティアの物語」を読んでいると、FGM/Cはたしかに苦痛と恐怖、そして、ときに重大な保健上のリスクを伴うが、少なくとも彼女と同世代のシエラレオネ人女性にとってそれは女性の人権侵害などではなく、むしろそれを受けられないようなことがあれば、そのことこそが逆に「人権侵害」とさえいえてしまえそうな、今日の国際社会レベルの常識から見るとやや倒錯した心証さえ覚える。シエラレオネのFGM/C問題を考える際には、国際社会レベルで語られる「普遍

的」な言説に加え、サティアのようなひとりのシエラレオネ人女性の声にも虚心坦懐に耳を傾けることが、その眼差しの相対化という意味では有用であるのかもしれない。

付記

本研究はJSPS科研費23401017の助成を受けたものである。

注

- 1) 女性性器切除は、かつて「女性割礼 (female circumcision: FC)」と呼ばれていた。しかし、*circumcision* (割礼) という表現を用いてしまうと、性器切除のあり方や施術後の影響が男性割礼とまったく異なるにもかかわらず、それに類似の営為であると誤解されかねないこともあって、1970年代後半からは「女性性器切除 (female genital mutilation: FGM)」という表現が国際社会で広く用いられるようになった。さらに、1990年代後半以降になると、*mutilation* (切除) という表現が実際の施術のあり方を必ずしも適切に反映しておらず、また、ネガティブな意味合いをもちすぎているとして、より価値中立的な *cutting* (切除) という表現を用いた “female genital cutting (FGC)” あるいは “female genital mutilation/cutting (FGM/C)” という名称が一部の国際機関などで使用されるようになっていく。ちなみに略称でいえば、国際機関では、世界保健機関 (WHO) がFGMを用いているのに対して、国連児童基金 (UNICEF) や国連人口基金 (UNFPA) の文書ではFGM/Cが使用されており [WHO 2008: 22]、本稿ではとりあえず後者の表現を用いることとする。
- 2) シエラレオネにおけるブンドゥー結社と女性性器切除に関しては、日本語ではすでに内海 [2003: 13-29] の著作がある。
- 3) これまでのFGM/C廃絶運動とFGM/C研究史については、たとえば富永 [2004] に詳しい。
- 4) シエラレオネでは2015年にMICSが実施される予定だが、たとえ同調査が実施されたとしても、その最終報告書が公表されるのは2016年になる見込みである。なお、本稿では以下、たとえば2010年にシエラレオネで実施されたMICSについては「2010 SLMICS」、2013年に同国で実施されたDHSについては「2013 SLDHS」といった形で略記する。この場合の「2010」や「2013」といった数字は、「調査報告書の発行年」ではなく「調査自体の実施年」であるので注意されたい。
- 5) “Sierra Leone: The Political Battle on FGM/C,” IRIN (<http://www.irinnews.org/> 2015年2月13日アクセス)。
- 6) “Ebola Fears Bring Female Genital Mutilation to near Halt in Sierra Leone,” Al Jazeera America (<http://>

//america.aljazeera.com/ 2015年2月13日アクセス).

- 7) ポロ結社やサンデ結社の詳細については、たとえば Little [1967]、真島 [1997]、Fanthorpe [2007]などを参照されたい。
- 8) ブンドゥー結社長は一般にソウェイと呼称されるが、そのほかにも、たとえばテムネ語ではディバ (Digba)、メンデ語ではマジョ (Majo) などと呼ばれている [Bjälkander et al. 2012a: 121]。

参考文献

邦文献

- 内海夏子 (2003) 『ドキュメント 女子割礼』集英社。
- 土井茂則 (1986) 「ケニア独立運動に関する一考察——キリスト教ミッションとキクユ族の「女子割礼」をめぐる対立について——」、『アフリカ研究』(28)、pp. 48-69。
- 富永智津子 (2004) 「「女子割礼」をめぐる研究動向——英語文献と日本語文献を中心に——」、『地域研究』6(1)、pp. 169-197。
- 額田康子 (2007) 「植民地ケニアにおける女性割礼論争再考——「女性の健康保護」言説と文化植民地主義——」、『人間社会学研究集録』(大阪府立大学)(3)、pp. 57-79。
- プレスリー、コーラ・アン (1999) 『アフリカの女性史——ケニア独立闘争とキクユ社会——』(富永智津子訳)、未来社 (Cora Ann Presley, *Kikuyu Women, the Mau Mau Rebellion, and Social Change in Kenya*, Boulder, CO: Westview Press, 1992)。
- ホスケン、フラン (1993) 『女子割礼——因習に呪縛される女性の性と人権——』(鳥居千代香訳)、明石書店 (Fran P. Hosken, *The Hosken Report: Genital and Sexual Mutilation of Females*, third revised edition, Lexington, MA: Women's International Network News, 1982)。
- 真島一郎 (1997) 「西大西洋中央地域 (CWA) とポロ結社の史的考察——シエラレオネ、リベリア、ギニア、コートディヴォワール——」、『アジア・アフリカ言語文化研究』(東京外国語大学)(53)、pp. 1-82。

欧文献

- 28 Too Many (2014) *Country Profile: FGM in Sierra Leone* (<http://www.28toomany.org/> 2015年1月30日アクセス)。
- Bjälkander, Owolabi, Bailah Leigh, Grace Harman, Staffan Bergström and Lars Almroth (2012a) "Female Genital Mutilation in Sierra Leone: Who are the Decision Makers?" *African Journal of Reproductive Health*, 16(4), pp. 119-131.
- Bjälkander, Owolabi, Laurel Bangura, Bailah Leigh, Vanja Berggren, Staffan Bergström and Lars Almroth (2012b) "Health Complications of Female Genital Mutilation in Sierra Leone," *International Journal of Women's Health*, 2012(4), pp. 321-331.

Bjälkander, Owolabi (2013) *Female Genital Mutilation in Sierra Leone*, Stockholm: Karolinska Institutet (<https://publications.ki.se/> 2015年1月30日アクセス)。

Bjälkander, Owolabi, Donald S. Grant, Vanja Berggren, Heli Bathija and Lars Almroth (2013) "Female Genital Mutilation in Sierra Leone: Forms, Reliability of Reported Status, and Accuracy of Related Demographic and Health Survey Questions," *Obstetrics and Gynecology International*, 2013, pp. 1-14 (<http://www.hindawi.com/> 2015年1月30日アクセス)。

Bosire, Obara Tom (2012) *The Bondo Secret Society: Female Circumcision and the Sierra Leonean State*, Ph.D thesis of the University of Glasgow (<http://theses.gla.ac.uk/3506/> 2015年1月30日アクセス)。

Fanthorpe, Richard (2007) *Sierra Leone: The Influence of the Secret Societies, with Special Reference to Female Genital Mutilation* (<http://www.refworld.org/> 2015年1月30日アクセス)。

Koso-Thomas, Olayinka (1987) *The Circumcision of Women: A Strategy for Eradication*, London and New Jersey: Zed Books.

Little, Kenneth (1967) *The Mende of Sierra Leone: A West African People in Transition*, London: Routledge & Kegan Paul (original edition 1951).

United Nations Children's Fund (UNICEF) (2013) *Female Genital Mutilation/Cutting: A Statistical Overview and Exploration of the Dynamics of Change*, New York: UNICEF (<http://www.childinfo.org/> 2015年1月30日アクセス)。

United Nations Population Fund and United Nations Children's Fund (UNFPA and UNICEF) (2014) *UNFPA-UNICEF Joint Programme on Female Genital Mutilation/Cutting: Accelerating Change, Summary Report of Phase I 2008-2013* (<http://www.unfpa.org/> 2015年2月4日アクセス)。

World Health Organization (WHO) (2008) *Eliminating Female Genital Mutilation: An Interagency Statement ONCHR, UNAIDS, UNDP, UNECA, UNESCO, UNFPA, UNHCR, UNICEF, UNIFEM, WHO*, Geneva: WHO (<http://whqlibdoc.who.int/> 2015年1月30日アクセス)。

統計調査報告書

Sierra Leone Demographic and Health Survey 2008 (<http://dhsprogram.com/> 2015年2月22日アクセス)。

Sierra Leone Demographic and Health Survey 2013 (<http://dhsprogram.com/> 2015年2月22日アクセス)。

Sierra Leone Multiple Indicator Cluster Survey 2010 (<http://www.childinfo.org/> 2015年2月22日アクセス)。